

読書会 1月のテキストについて

今回は、山極寿一 「サル化」する人間社会 集英社インターナショナル 2014 を取り上げました。

表題はサルと人間ですが、内容はゴリラの生態と人類進化の過程で生まれた家族の起源とその意味について触れられ、示唆の深い読み物でした。これから訪れるであろうロボットやAIが普及する社会を前に、人間とは人間社会とは何であったのかという問いのヒントにもなるかと思いました。

取り上げられたゴリラの生態は大変興味深いもので思わず「ゴリラがいい人」に思えてしまう、著者のゴリラ愛に溢れる一冊です。

人類が類人猿から分岐して現在に至るまで約700万年の歴史があったと言われていきます。進化が一直線に進んできた訳ではないでしょうから、それを考えるとゴリラ起源だけでなく、さらにそこで起きたさまざまな事についても興味を刺激されました。

## 著者について

霊長類、特にゴリラの生態について長年研究をし、京大霊長類研究所所長を経て2014年に京大総長に就任しています。専門分野の研究を基に、現代日本社会について著作や雑誌、講演などでも活動をしています。

本書では、ゴリラの生態・社会を片方に置くと、人間社会はどう見えるかを述べています。

### (1) ゴリラの生態

ゴリラというとキングコング的な動物をイメージしがちですが、群れの中では喧嘩をしても勝ち負けを決するまでは行かず、仲裁者が入ることもあり、互いに見つめあって和解し、序列を作らない平和主義者である。一方、多くのサルは力の強いものを頂点に序列社会を作る。

またいくつかの習性として、授乳期が終わった子供は、自分の子でなくてもオスが世話する。仲間に気を遣う行動が見られ、子供など下位の相手に食べ物を譲る。木から落ちた時にテレ臭そうな表情をする。歌のような声を発する。オスが複数いる集団では同性愛もみられる。遊びも、特に若いうちはよくやるなど興味深い記述があります。

著者が観察中に大木の洞で雨宿りをしていると、コドモオスが覗き込んきてまもなく中に入ってき、著者に体を押し付けたまま、やがて眠り込んでしまうという事もあった。

26年後にテレビ取材で再び現地を訪れ、もはや老人となったそのゴリラと再開を果たすが、この時の行動にもまたゴリラらしい親しみを感じてしまいます。

### (2) 人間社会

類人猿から人間になったプロセスの中に人間社会の本質があるのではないか。「二足歩行、食の変化(肉食化)、脳の拡大など」は生物的進化であり、ゴリラ社会との共通性を思わせ

る「食を分けあうこと、家族、その中での子育て」さらに「言語の発達、共同体形成など」は文化として後天的に発展したというのではなく、環境変化に対応して熱帯の森から草原に移住し、生存を確保するための不可分の要素としてこれらが共に人間の進化をもたらした。従ってここに人間社会の基本があると著者は考えています。

ところが、近年、経済・個人の利益重視、個食化、スマホなど普及などにより共感力の重要性、家族や共同体への帰属意識が薄れ、「勝ち負け重視のサル社会」になりつつあるのではないか。

本来のフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションを活発にして共感力や家族の役割を見直すべきと述べています。

(坂田)